様　式　Ｚ－７

平成２８年度科学研究費助成事業　実績報告書（研究実績報告書）

1．機関番号　3 2 6 0 4

2．研究機関名　大妻女子大学

3．研究種目名　基盤研究(B)（海外学術調査）

4．研究期間　平成２６年度～平成３０年度

5．課題番号　2 6 3 0 1 0 3 3

6．研究課題名　日系国際児のバイリテラシー形成過程の質的探究とその展開

7．研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
4 0 3 5 0 5 6 6	シバヤマ　マコト 柴山　真琴	家政学部	教授

8．研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名
0 0 1 8 8 0 3 8	タカハシ　ノボル 高橋　登	大阪教育大学・教育学部	教授
8 0 4 0 9 7 2 1	イケガミ　マキコ 池上　摩希子	早稲田大学・国際学術院(日本語教育研究科)	教授

9．研究実績の概要

本研究の目的は、ドイツ居住の独日国際家族を対象に幼児期・児童期のバイリテラシー形成過程の更なる解明を進めることである。具体的な課題は以下の通り。【課題1】家族の多様性に通底するバイリテラシー実践の基本原理の抽出：対象家族のバイリテラシー実践の特徴を明らかにし、第Ｉ期研究の対象家族との比較を通して家族間協働の多様性に通底する基本原理を取り出す。【課題2】継承語としての日本語リテラシー形成過程の特徴の解明：作文力評価の指標を整備することにより、独日国際児の作文力の発達過程がモノリンガル児とどう異なるのかを解明する。

上記課題を明らかにするために、平成28年度は(A)と(B)の研究調査を行った。

(A)【課題1】に関わる調査研究：[調査1]日誌法による対象児の行動観察調査、[調査2]対象児の通学校(現地校と日本語補習授業校)等でのフィールド調査、[調査3]対象児の二言語力(ドイツ語力と日本語力)調査(会話力、作文力、語彙･文法･読解力の測定)の3年次調査を行い、調査ごとに年度末までに大方のデータの整理を行った。さらに第Ｉ期研究の対象家族と本研究の対象家族の一部のデータを用いて、独日国際家族のバイリテラシー実践の特徴を論文としてまとめた。

(B)【課題2】に関わる調査研究：前年度の作業を踏まえて本年度は2つの作業を行った。(1)日本語母語児の「作文評価法」の精緻化：「談話レベル」の評価指標となる「ルーブリック」の小4児用の改訂作業を続け、年度末に改訂版を作成した。(2)国際児の日本語作文データの収集と分析：平成27年度に実施した補習校小6児(ほとんどが国際児)の日本語作文の分析結果を報告書としてまとめ、口頭説明を加えながら補習校側にフィードバックした。但し、平成27年度は小6児が少なく作文データの積み増しが必要であったため、平成28年度も同補習校小6児を対象に日本語作文調査を実施した。

10．キーワード

(1) 継承語としての日本語の作文力　(2) 独日国際家族　(3) バイリテラシー実践　(4)

(5)　(6)　(7)　(8)

（注）・印刷に当たっては、Ａ４判（縦長）・両面印刷すること。

11. 現在までの進捗状況

（区分）（2）おおむね順調に進展している。

（理由）

9に記した2つの調査研究と対応させると以下の通りである。
(A)【課題1】に関わる調査研究：当初の計画通り、[調査1]から「調査3」までの3つの調査の3年次調査を行うことができた。また、調査データの一部の分析結果を論文としてまとめることができた(論文題目:「子どもの言語習得とグローバル化時代のインターフェース：海外居住の国際家族におけるバイリテラシー実践を手がかりに」／日本発達心理学会誌『発達心理学研究』第27巻第4号[2016年12月発行]に掲載済み)。
(B)【課題2】に関わる調査研究：(1)日本語母語児の作文力の指標である「作文評価法」の精緻化、(2)国際児の日本語作文データの収集と分析、を課題として設定した。(1)については、談話レベルの分析指標である「ルーブリック」の改訂は予想以上に難しい課題も多く、改訂作業に時間がかかったが、小4児用ルーブリックの改訂版を作成することができた。(2)については、補習校小6児を対象に作文調査(第2回調査)を実施する一方で、補習校小6児(第1回調査)の作文の分析結果を上述の「作文評価法」を用いて分析し、報告書としてまとめることができた。

以上の理由から、「おおむね順調に進展している」と自己評価した。

12. 今後の研究の推進方策　等

（今後の推進方策）

次年度に向けて、以下のように調査研究を推進していきたいと考えている。
(A)【課題1】に関わる調査研究：[調査1]から[調査3]までの3つの調査の4年次調査を行うことにより、対象家族のバイリテラシー実践過程に関わるデータを系統的かつ多層的に蓄積していく。併せて、調査ごとにデータの整理も進めていく。
(B)【課題2】に関わる調査研究：児童期の「作文評価法」(平成26年度に開発)における3つのレベルのうち、1)文字・表記・単語レベル、2)構文レベルについては、ほぼ完成している状態で、3)談話レベルについては、小4児用ルーブリックの改訂作業が終わっているが、小6児用と小2児用の改訂作業は継続中である。次年度も引き続き小6児用ルーブリックと小2児用ルーブリックの改訂作業を続け、改正版を作成する予定である。
また、独日国際児の日本語作文の分析については、平成28年度に収集した補習校小6児(ほとんどが国際児)の作文データ(第2回調査)の分析を行い、報告書としてまとめる予定である。分析においては、上述の「作文評価法」を用いるが、談話レベルの分析については、改訂済みのルーブリックを使う予定である。
なお、補習校での作文調査については、補習校側と調整の上、今後も作文調査の実施が可能であれば、対象学年を拡大させて作文データを収集していきたい。

（次年度使用額が生じた理由と使用計画）

（理由）

研究分担者の海外調査のための海外旅費他として37万円を用意したが、年度当初には予想されなかった術後の体調不良により海外調査に参加することができず、37万円が未使用となったため。
また、ドイツ語音声データの文字起こしとその翻訳を業者に発注する際に、文字起こしと日本語翻訳を同時発注すると共に計画的に発注することによって割引をしてもらうことができたことから、約37万円を節約することができたため。

（使用計画）

海外旅費については、次年度(平成29年度)に実施予定の海外調査の旅費として使用する予定である。
また、分析謝金については、次年度(平成29年度)に予定している調査データの保存に関わる経費(音声データの文字起こし及び翻訳など)として使用する予定である。

（課題番号： 26301033 ）

13.研究発表（平成２８年度の研究成果）

〔雑誌論文〕　計（０）件／うち査読付論文　計（０）件／うち国際共著論文　計（０）件／うちオープンアクセス　計（０）件

著　者　名	論　　文　　標　　題

雑　　誌　　名	査読の有無	巻	発行年	最初と最後の頁	国際共著

掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）

オープンアクセス

〔学会発表〕　計（０）件／うち招待講演　計（０）件／うち国際学会　計（０）件

発　表　者　名	発　　表　　標　　題

学　会　等　名	発表年月日	発　表　場　所

〔図書〕　計（１）件

著　者　名	出　版　社
柴山真琴	福村出版

書　　名	発行年	総ページ数
『新･発達心理学ハンドブック』（田島信元他編、20章「文化人類学･文化社会学からの示唆」を分担執筆）	2016	1004ページ

14.研究成果による産業財産権の出願・取得状況

〔出願〕　計（０）件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	出願年月日	国内・外国の別

（課題番号：　26301033　）

（注）・印刷に当たっては、Ａ４判（縦長）・両面印刷すること。

〔取得〕　計（０）件

産業財産権の名称	発明者	権利者	産業財産権の種類、番号	取得年月日	国内・外国の別
				出願年月日	

15.科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計（０）件

国際研究集会名	開催年月日	開催場所

16.本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

（１）国際共同研究：－

17.備考

大妻女子大学研究助成情報／採択課題・実績報告書等
http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/jyosei/modules/saitaku/

（課題番号： 26301033 ）
（注）・印刷に当たっては、Ａ４判（縦長）・両面印刷すること。